

中露の SU-35 輸出入交渉の内幕

漢和防務評論 20160104 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中露の S-35 輸出入協議は、双方の利害が対立し長引いていましたが、昨年 11 月、政治解決し合意署名されたようです。

中国がライセンス生産した航空機以外のコピー生産した中国製ロシア戦闘機は、結局オリジナル機の性能に及ばず、しかも国産航空武器が搭載できないという結果になり、中国は SU-35 の交渉を通じて、そのノウハウを獲得しようとしたようです。

その内幕を暴露した漢和の記事を紹介します。

編者註：

これは 2015 年 7 月の話である。SU-35 の輸出入協議はすでに 2015 年 11 月に中露間で合意署名されている。KDR としては、SU-35 の輸出入に関する報道の完全を期するため、引き続き追跡報道することにした。双方の交渉は、かなり困難であったが 8 月以降の交渉スピードは加速されたのである。

KDR モスクワ平可夫特電：

KDR は、7 月以降の中露の SU-35 輸出入交渉の内容を知ることが出来た。

まず結論から述べると：中国は依然として各種問題を提起してきた。9 月にも一連の交渉を行ったばかりである。中露は、SU-35 に関しすでに 2 年以上交渉を行っている。かつて SU-30MKK の輸入交渉の時は 1 年しかかからなかった。交渉での問題点はますます複雑になり、今年（2015 年）に入ってから最終価格さえ意見が一致しなくなった。中国側の消息筋は KDR に対し：中国代表团は、各回の交渉の前に総装備部、空軍装備部及び瀋陽航空機会社が提出した各種の新たな問題を総括し、これらの新たな問題を提議しつつ交渉に当たった。しかし一部の問題は、SU-35 自身の輸入とは直接関係なかった、と述べた。

KDR は、中国側が SU-35 の輸出入交渉を長引かせることによって中国側に有利に交渉を進めようとしていることを疑った。その目的は、明らかに J-11B、J-11D、J-16、J-15 の改修問題に関連がある。“帰国してから、交渉結果の全てを関連部門に報告した。中国はこれらの問題を自力で解決できるかどうか。もし出来なければ、以後の中露交渉で再び提議することになる” 消息筋はこのように述べ

た。

これに対してロシアの関連部門の責任者は、KDR に対して次のように述べた：我々は、中国側の手法を良く知っている。彼らは過去にも同じようにやった。我々はどうしたら良いだろうか？彼らが提議した複雑な問題にいちいち回答することなど出来るだろうか？双方の政治家は、契約成立を希望している。これは政治であり、特にロシアと西側の関係が悪化している時期には単なる軍事装備品の輸出問題として処理することはできない、と。

しかし双方の軍事工業界にとって 2 年間の交渉過程の業務量は相当多かった。たった 24 機の SU-35S なのに、なぜ交渉問題がますます複雑になったのか？ロシアの目標は終始一貫していた。すなわち標準型の機体を製品として輸出することである。中国側がどの程度の改修要求をもっていようと、中国側に引き渡してから改めて行うべきである。この方式のどこに問題があるのだろうか？

KDR の 2 番目の結論は次の通り：中国は、SU-27 に諸々の改修を行って 15 年経過した。上述の J-11B の性能は、特に機動性は、J-11A レベル（ノックダウン版の 70%）である。しかも不思議なことに、2015 年には J-15 や J-16 の生産機数が次第に少なくなっている。上述の中国製の機体は、J-11B が部隊装備を開始し、その他の機体も試作段階に入っている。J-15 や J-16 はすでに 4 年以上の試験期間を経過しているのに、J-15 は何機生産したのだろうか？

中国空軍の機種更新の基本原則は次の通り：新型機は、最初に広州、南京戦区の若干の最精鋭空軍部隊に配備される。例えば、3、2、18 師団である。これらの精鋭部隊は、国産の太行エンジンを搭載した J-11B を装備したのだろうか？或いは J-16 はどうか？そんなはずはない。J-11B が配備された部隊は、多くがコルラ（新疆ウイグル自治区）及び秦皇島（河北省）に駐屯する第二線の飛行部隊である。もしこれらの航空機（J-11B）が J-11A の技術水準に達しているならば、なぜこれらの精鋭師団に配分しないのであろうか？ところが、そうではなく第二線空軍及び海軍航空兵第 9 師団に配備しているのだ。部隊が配備を歓迎するのは、J-11A 及び SU-30MKK である。

材料運用のまずさ、及びソ連製 SU-27 の基礎的な設計特性の理解未消化のためである。この 15 年間の J-11B から J-16 に至る生産状況から、KDR は次のように見ている：成功したとは言えない！と。しかし生産しないことには、瀋陽航空機会社は存続できない。中国側は、この技術的障害を如何に解決するつもりであらうか？

中国は、SU-35 の輸入交渉を通じて、ロシアが行った SU-27 から SU-35 に至る改良の全過程を把握し、二つの種類の航空機（ロシア製と中国製）の技術の違

いを探し出し、特にアビオニクス、フライトコントロールシステム、及びウェポンシステムを整合させる細部技術、さらには材料運用、設計の基礎等々を探ろうとしている。これが、中国側が交渉を長引かせている理由である。

このほか、SU-30MKK 及び MK2 を如何に改良するか？これもまた中国が SU-35 交渉を通じて掌握したがつている極秘技術である。KDR は、ネット上に出現した SU-30MKK が携帯する中国製航法用ポッドの写真に注目した。これは、中国が SU-30MKK のソースコードを解読したことを意味するのであろうか？

これに対して、中国の消息筋は KDR に対して次のように述べた：確かに数種類の国産航法ポッドを SU-30MKK で試験中である。民間の企業は自力生産した航法ポッドを推奨している。しかしこれらの試験は、単体でかつ試験装置の上で行っているので、SU-30MKK の統合火器管制システムとは整合させていない、と。

KDR は、SU-30MKK/MK2 に中国製武器を搭載した写真を見たことが無い。上述の種々の証言から、中国は、未だ SU-30MKK のソースコードを解読していないようだ。ライセンス生産した J-11A は他機種と異なり、すでに中国製武器を搭載している。

中国は、SU-30MKK をどのように改良する積りであろうか？中国は SU-35 の輸入交渉を通じて答えを出そうとしている。これが、中国が武器を含めた各種中国製装備を SU-35 に搭載させようとしている理由である。かなり一貫した改修メニューがあれば SU-35 を如何に改修すれば良いか分かる。中国は、これらの知識を得ることによって自ら J-11A や SU-30 を技術的に改良する可能性がある。實際上、SU-35S が 24 機だけでは、それほど大規模な技術的改良が必要とは思えない。しかも中国は、SU-35 の生産技術の転移を未だ求めている。

KDR は、次のように考える：中国は、SU-35 に関する輸出入交渉を今後も続けるであろう、と。これに対して、交渉に当たったロシア側専門家は：ロシアは、中国が最終的に協議に署名すると見ている。但し、それが何時になるか、誰も分からない、と述べた。

KDR が今回モスクワで分かったことは、交渉が 2 年にわたって行われたが、現在でも SU-35 がどのような武器を搭載するのかさえ確定していないことだ。今回のモスクワ航空ショーには、中国空軍及び総装備部は、SU-35 視察を目的とした最高レベルの代表団は送らなかった。総装備部の副政治委員及び中將級の官員が SU-35 のシミュレーターに搭乗しただけである。

SU-35 に搭載する輸出可能な武器について、ロシア戦術ミサイル集団総裁の BORIS V.OBNOSOV は、KDR に対し：SU-35 及び MIG-35 のために、新時代の戦術ミサイル GROM-E1 を設計した。同ミサイルは一部ロケットエンジンを搭載している。射程は、戦術級である。(KDR は最大射程が 290 KM 以上であ

ると見ている) 基本的な技術特性として、滑空翼を取付け、ミッドコースでは GPS/GNASS 誘導を採用している、と述べた。しかし彼は、弾薬技術の細部に就いて証言を拒否した。また輸出許可を獲得したことを強調したが、現在輸出はされていない。

その他の消息筋によると: GROM-E1 の弾頭は 300 KG 級で、全体重量は 600 KG を超えると言う。信管は、触発式 (CONTACT)、遅延式 (SHORT DERAY)、空爆式 (AIR BURST) がある。GROM-E2 は、動力を持たず、弾頭重量は 450 KG に増加した。両種の実ミサイルは、主として地上の戦術、戦略目標攻撃に用いられる。

KH-59MK2 型空対地ミサイルが初めて展示された。同ミサイルの弾体はステルス化され、弾頭重量は 300 – 700 KG、長さは 4.2 M、翼幅 2.45 M、射程 290 KM、終末速度 1000 KM/H で、対艦、対地攻撃に用いられる。戦術ミサイル集団会社の他の消息筋によると、この種ミサイルは、KH59MK と同様にすでに中国に紹介されているが、未だ輸出はされていないと言う。また BORIS V.OBNOSOV は、別の種類の最新展示された対レーダーミサイル KH-58USHK IIR を紹介した。これは初めての展示であり、輸出も出来る。最も重要な特徴は、同ミサイルは IR SEEKER を追加し、対妨害機能を高めたことである。パッシブレーダーの作動範囲は、1.2 乃至 11GHZ である。同ミサイルは、重量 650 KG、長さ 4.19 M、翼幅 0.8 M、直径 380 MM であり、翼は折畳式である。また最大射程は 245 KM、CEP は 10 M、弾頭重量は 149 KG である。

KDR が知り得た状況は次の通り: 中国は、上述の最先進型航空武器を購入するかどうか未確定である。このことは、SU-35 に関する交渉が未だこの段階まで進展していないことを意味している。

中国は弾薬も購入するのか? 航空機だけを輸入するのか? 或いは、今回展示された最先進の航空武器を複製するのか? ロシア戦術ミサイル集団の消息筋は、次のように述べた: 複製されるため、ロシア側は上述の最新型航空武器を公開したくない、と。同集団会社の権威筋は、記者会見において次のように述べた: 上述の最先端高性能武器を複製できる能力があるとは中国人自身も思っていない。特に対レーダーミサイルはそうである。“中国は KH-31P 型ミサイルを大量生産していない。この種のミサイル技術は、1990 年代に中国に技術移転された。しかし彼らは、ロシアが部品を提供しなければ、今のところ大量生産はできない、と。

時間が経てば経つほど、SU-35 の単価は高騰してくる可能性がある。その理由は、ルーブルの価値がこの 1 年で 50% 近く下がったからである。KDR 記者は、ロシアの通貨膨脹が去年に比べ厳しく、物価も高騰しているのを実感している。ロシア軍事工業界の消息筋は、KDR に対し次のように述べた: 我々がロシア軍

用に納入する装備品の価格は逐次変化している。ある種の武器の価格は、通常は 2 年程度で改訂される。それは通常 3 乃至 5% の範囲である。これが正常な状況だ、と。

以上